

鶴見半島の猪垣について

(其の三) 丹賀・梶寄地区

南海部郡鶴見町羽出浦

賛助会員 安部 弥 右 衛 門

宇土湾から海岸沿いに、丹賀浦に向かつて船を進めると、右手の磯辺に紫雲石のような名の山がある。ここが「赤鼻」というところ、次の土上河内に至る中間の海岸近くから、山の斜面を山頂に向って、一線々猪垣が延びている。この山が「ワルサ山」であり、かの切支丹寺趾といわれるところも、この山がなり高い所である。

この猪垣は、山頂の米水津村との境界線近くは達して、東に折れ、境界線に沿って山頂を鶴見町に向って進み、丹賀の上を過ぎて後、北に折れて山の斜面を下り、「ニゴの浦」の海辺近くに達しており、これで丹賀浦の部落も耕地も、ほとんど囲まれている。(次頁地図参照)

私の知る限りでは、この「ニゴの浦」の猪垣は、どこのもよりも見事に出来ていると思う。丹賀浦の長老武田源五郎氏は、数年前私に、次のような話を聞かせて下さった。

この猪垣を築いた時には、藩から監督に出張っていた彼人が、仕事場を見廻り、働き振りがよい人夫があれは、袂から紅い布ととり出して細かく裂き、その人夫の「マゲ」にむすんだにえして、其の日の仕事が終わって弁当料を渡す時に、「マゲ」に紅い布を結んである人夫には、

「この昔には割増をよえよ」といって、幾何かの銭を多くよえたという。そこで買件嫌いの人夫達の士気が揚つて、工事場には活気があふれていたという。

この伝説から考えると、この猪垣は、江戸時代の旧藩政時代の築造ということになる。一説にはこの鶴見半島の猪垣を作った時に働いた人夫には、毎日麦七合宛か、又日米半代として、銭若干宛を支給したということであるが、借銭をよえたという記録はないようである。

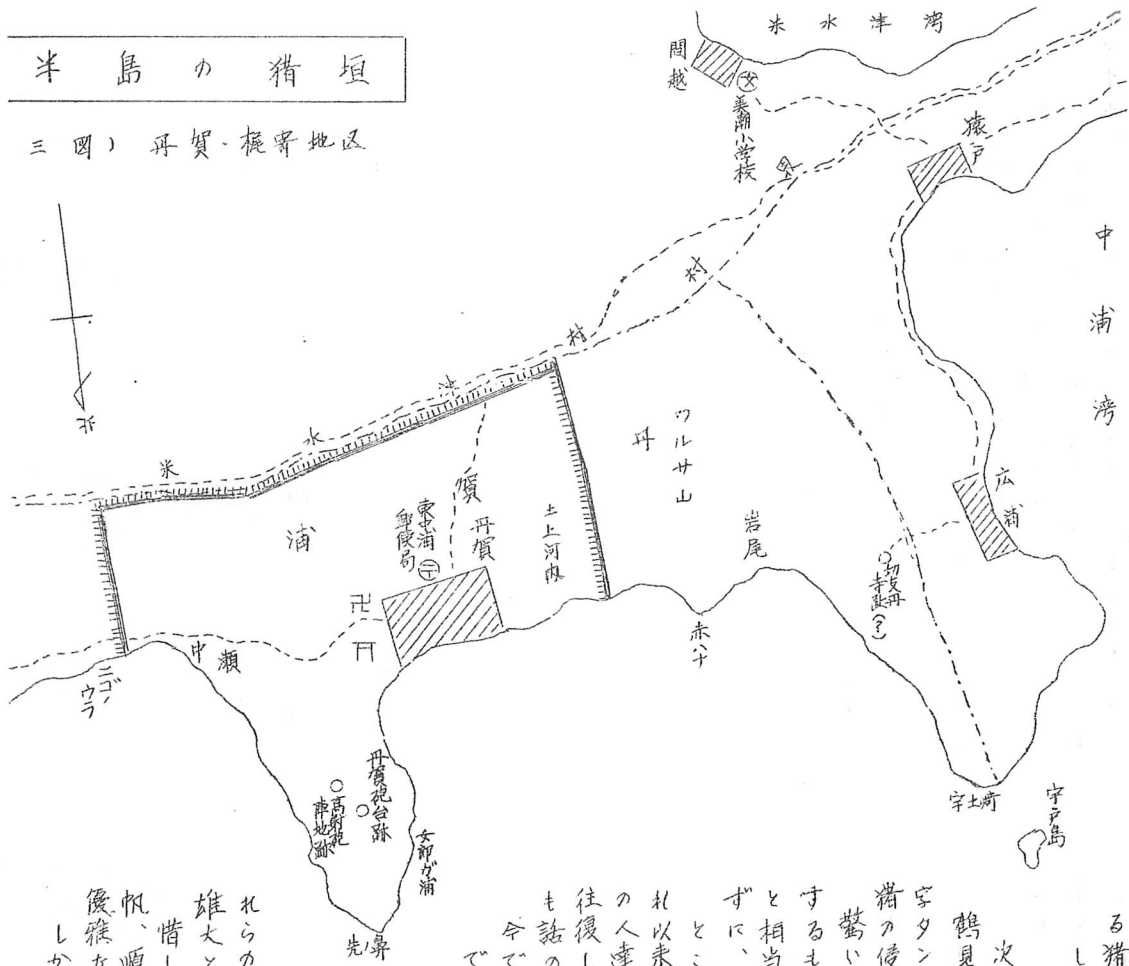
丹賀浦猪垣の東端つれである「ニゴの浦」から、梶寄に向かつてすすむ、中瀬をすぎた丹賀浦と梶寄浦との境界線を超え、鶴の磯という海岸がある。ここからはるか南方の山頂、米水津村との境界線に向って、猪垣が構築されている。村の人はこの猪垣を「堅堀」と呼んでいる。

この猪垣は、頂上から東に向かい、米水津村との境界線に沿って鶴見湾の方向に延び、梶寄と下梶寄との中間位の尻根から斜に下り、更に下梶寄に近いく所まで折れて部落を囲むようにして、水ヶ尻の海岸に達する。これで猪垣は完全に梶寄浦の部落と耕地を囲んだことになる。この外に尚もう一庄の猪垣が、背後の米水津村の地内にも造られている。それは由ヶ浦の東方にある檜原の堅堀であり、頂上の猪垣からまっ直に斜面を下り、海岸近くの断崖に達している。由ヶ浦の戸数は、明治・大正の頃も数軒にすぎなかつた点から、この石垣も梶寄浦が主として構築したものであるまいか。

私は、鶴見半島に猪の多いのは、祖母山系で産まれた猪が、はるばる移動して来るものと思つていた。ところが、猪はこの半島の山野でも産する例があり、出没す

# 半島の猪垣

三 國) 丹賀・梶寄地区



る猪に仔猪を伴れたものがあり、この鶴見半島で出産した猪の子がかたまりあるとのことである。

次のような話が伝えられている。

鶴見崎から五里(二十坪)以上距離のある、浦代浦の宇タンネへ桑、または田鶴音の田に総ついている猪が、猪の侵入によって、一夜のうち自穂になってしまった。驚いた土地の人たちは、獵師に頼んで周囲の山狩りをするも、一頭の猪も捕えることが出来ない。足跡を見ると相当な古猪らしいとわかつたが、毎年倒すこと出来ずに、被害はつづいた。

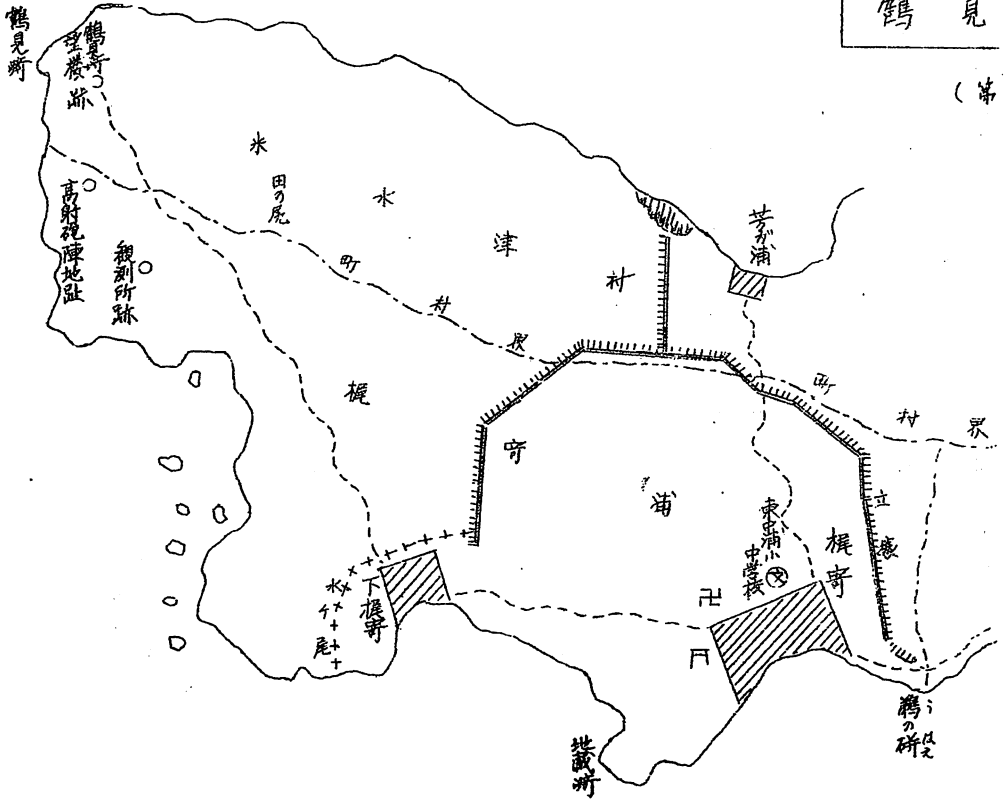
ところがある年、鶴見崎で珍らしい大猪を倒した。それ以来、タンネの猪の被害はなくなった。それどころか人達は「鶴見崎の猪が、毎夜、鶴見崎とタンネの間を往復して作物を荒していたのだから」と話し合い、今でも話の材料になつてゐる。

今でもこの、鶴見崎一帯の山野には、沢山の猪が棲んでゐるとのことである。

丹賀浦の猪垣も、梶寄浦の猪垣も、米水津村との境界線に沿つて延びていて、そこは鶴見半島の尾根であるので、眺望は絶佳である。佐伯湾、豊後水道、四国の山々、太平洋、日向灘、それらの海に浮かぶ島々。祖母・傾の遠望など、まことに雄大といふべく、己れを忘れて立去るを怠るるであらう。惜しいことに、明治・大正の頃の、大海原に真帆・片帆、順風に帆を孕ませて、長閑に走つていた帆かけ船の優雅な姿は、今は見ることは出来ない。しかし、素晴らしい景観である。

# 鶴見

(第



この猪垣のある尾根を、東へ東へと進めば、半島の岬である鶴見崎に達するのであるが、その途中に田の尻と

いう所がある。この辺りは山の尾根であるのだから、小さな溝があり、かたりの量の水が音を立てて西向きに流れている。尾根の南側は一面の萱野で、中に荒れ果てた広い田畑らしい所がある。

ここには以前佐伯の藩士であった山路という人が根寄に移り住み、この山頂に田を作っていたという。夢のような話である。

岬下は、明治年代に造られた海軍望楼の跡と、太平洋戦争中造った観測所と、高射砲陣地の跡が、空しく昔の名残りを残している。

ここは眺望は申し分ない所である。ここから山道伝いに、北寄りに山を下れば下振寄の岬に出る。ここには水ノ子燈台に勤務する職員が官舎の跡がある。これら施設の跡を見れば、僻地鶴見半島の一角も、当時の国策に十二分の寄与をした点と想起する。また、元の間海峡をへたてた大島には、江戸時代、佐伯藩の海の御番所が置かれて、藩の治安とこの海域の安全確保に任じていた。このことは、広く一般には知られていない。

元の間海峡は、うす潮の逆まく瀬で、氷が力連着な猪も、この海峡の急潮に阻まれてか、鶴見崎に多く猪も、すぐ眼の前の大島には棲んでいない。

鶴見半島に住む人々の多くは、古来漁業を主とし、畑からの農耕による収穫は、住民の食糧を満すには足りなかつたことは明白である。土地が狭く、しかも瘠せ土、年に何回かの風害と潮害もある。それに加うるに、開港

かく歌むる猪の害、農民の苦難が察しられる。江戸時代  
一明治・大正一昭和と、この猪垣によってその被害を免  
れ得た効果は、幾何であつたであらうか。

斎藤忠著「猪垣考」によると、猪垣が中部、近畿、中  
國、四國、九州、沖繩と各地に亘り十例余を挙げてい  
が、その中で最も壮大なものは、瀬戸内海の小豆島にあ  
るものであらう。この猪垣は四十の部落に跨がり、その  
延長は三十里(百二十料)に及ぶという。しかもそれは  
領主が作つたものでなく、江戸時代は寛政の初め、望正  
(庄屋)村上考八郎が猪の害を憂い、島にある四十の部  
落にばかつて賛成を得、直ちに大工事に着手し、僅かに  
一年足らずで成就したという。

このように、猪垣は全国刻々起るわけであるが、  
その構造は猪土手と呼べれ、土を土つて土塁のようにし  
たものもあるが、大ていば石垣、即ち石を並べて、高さは約  
六尺、中三、四尺。荒蕪した原野や松林の中に、蜿蜒と  
して長く光景は、まことに壯観である。

親見半島の猪垣は全部石造りであるので、永久腐朽の  
心配はない。しかし、この石垣を築いた経費は、領主が  
支払つたものか、又は農民が賃銀として、各戸から夫役  
として仕事に出たものか、全国各地とも不明である。当  
地の場合、羽出浦と中越浦は、人夫一人に対して年当麦  
七合づつ、丹賀浦の場合、并当料として若干文づつを  
支給したという伝承がある。しかしそれとて藩から支給  
されたものか、各浦部落自体から支給したのか、明ら  
かでない。

次に猪垣構築の年代であるが、全国的な例では元祿以  
後であるが、鶴見半島の注のほどうちはつきりしない。  
左に羽出浦庄屋古文書の中の、「灰床開発願書」(佐伯史

談八十七号所載)の文意から考へると、天保年代か又は弘  
化年代ではないかと考へる。

最後の、ここに注意すべきことは、従来学者の中に  
日本各地に散在する多くの猪垣を、袴籠石や山城と混同  
して、しばしば論議を繰り返した実例がある。しかし、  
この鶴見半島の猪垣は、私たちが祖先が、猪の侵害を防  
ぐために、生活の苦しさ堪えながら、築きあげたもの  
であることを深く銘記して、将来いつまでもその保存に  
留意すべきであると考へる。(以上)

(付記)

猪垣を实地に見学なさる手引

海岸近くでは、

- 島江と猿戸の間高鳴力浜から中山の東西にある二線
- 丹賀から振寄への街道、三ツの浦の堅濠
- 同じく、松崎の鶴の磯の堅濠

が適当。尾根伝いは、

- 羽出浦コドウの鰐岡見から帆波の上の尾根からヨソイ谷へ線
  - (この沿線は県行造林で今年伐採したので歩きよい)
  - 中越浦から米水津村の小浦へ越す坂道を登つて頂上の猪垣
  - 猿戸から問越へ越す道を登つて、猿戸、中山の猪垣
  - 丹賀から尾根に登つて米水津村との境界線にある丹賀の猪垣
  - 振寄から尾根に登つての振寄の猪垣
- と、何か所があるが、秋の終り頃までは、雑木、雑草  
が道とさえぎつて歩きにくい。踏査の好期は冬分春の  
季節。特に尾根に登れば展望がすこぶるよい。(おわり)

(おわり) 紹介、考証詳細で系橋紙三十二枚の本文、それに地圖であ

つたが紙面の都合から一部有餘の余白をなすに至つた(用)